



理学部 教授

栗原 晴子先生

Q1.取り組んでいる研究・活動についての紹介

私は現在理学部海洋自然科学科生物系に所属しており、主にサンゴ礁海域での人の活動によって引き起こされる海の環境変動が生物やサンゴ礁生態系にどのような影響を及ぼすかについて研究を行っています。特に気候変動に伴う温暖化や酸性化がサンゴ礁に生息するサンゴやウニ類、シャコガイ類をはじめとする様々な生物に対してどのような影響を与え、将来のサンゴ礁生態系が今後どのように変化していく可能性があるのかについて研究を行っています。

また同時に例えば温暖化や酸性化などに対して耐性の高いサンゴ種は存在するのか、酸性化などを緩和する方法などについても研究をしています。

さらにサンゴ礁海域だけではなく、例えば東北や北海道など高緯度域に生息する生物との比較をすることによって、各海域によって気候変動の影響の受け方は異なるのか、どこの場所や生物が最も気候変動の影響を受けやすく保全していく必要があるのかなどについての研究も進めています。

Q2.研究の道に進んだきっかけ

大学の学部学生だった頃は生き物は全て最初は全く同じ「丸い」形をした卵として産まれるにもかかわらず、その後全く違う形へと変化していくことが不思議だと感じ発生学に興味を抱きました。そこで学部生だったころはマウスの発生に関する研究を行っていましたが、修士課程に進学してからは、ウニの進化発生学についての研究を行うようになりました。その過程で研究の材料となるウニを捕まえるために海に行くようになったことをきっかけに海にも興味を抱くようになりました。

またその頃、様々な排水の環境基準を評価する際、ウニの発生が50%正常に進む値によって決定されていることを知り、生物の発生と環境を結びつける研究を行うと面白いのではと思ひ考え、博士課程から海洋環境に関する研究をはじめ現在に至っています。

今振り返ると、研究の道へと進んだ何か強いきっかけというものは有りませんが、好奇心の赴くがままに、もう少し良く知りたいという思いを持って続けていた先にいつの間にか研究の道が開けていたという気がします。

Q3.研究者を目指す若者に対して、「これだけはしておいた方がいい」と思うこと

研究を続けていく上で最も重要だと感じることは、その研究に自分自身が最もワクワクし、もっと知りたい、理解したいという好奇心と情熱を抱き続けることだと思います。これさえあれば楽しいことも辛いことも乗り越えられていくことができるので、まずは自分が面白い・楽しい・意義深いと思うことを見つけることでしょうか？

また研究は一人で突きつめて探求していくという側面も有る一方で、全く異なる視点や考え、技術を持っている様々な方々と共に研究を行うことによって、はじめて明らかにできることも多く存在する。このため、多くの人と出会い、協力する仲間や知り合いをより多く増やしておく、後々それは大きな宝になると思います。

Q4.学生や研究者志望者におすすめの図書・雑誌

自身が大学生のころ読んだ本で印象に残っている本： ワンダフルライフ、進化の運命、鼻行類、沈黙の春、ネズミの時間象の時間、利己的な遺伝子など。また学生時代には良く学生仲間で集まって、種の起源や生態学、進化生物学や海洋学、セルなどの英語で書かれた教科書を輪読会を行っていたのはとても貴重な経験だったと感じています。

どんな本でも必ず後々の財産になるので、分野を問わずより多くの本をとにかくたくさん読むことを一番おすすめします。

